

# W.B. イエイツ：『幼年期と青春期の回想』

## I ~ V

訳・注釈 日 下 隆 平\*

1926年に『自叙伝集』は『幼年期と青春期の回想』と『垂絹のゆらぎ』の2編のみを収録して出版されたが、その後他の4編が加えられて現在の版となった。『幼年期と青春期の回想』について島津氏他による部分的注釈があるが、翻訳は初出である。テキストには *The Autobiographies*, (Macmillan, 1955) を使用した。なおここには全体106頁の中の40頁までの約三分の一を収録した。ここでは幼年期に大きな影響を及ぼした祖父と父、歴史を遡ってイエイツ家の出自について述べられている。同時に幼年期の罪意識なども回顧され興味深い。(原題：“Reveries over Childhood and Youth”)

翻訳に当たって以下のものを参考にした。

Edward Malins, *A Preface to Yeats*, (Longman, 1974).

David Pierce, *Yeats's Worlds*, (Yale U. P., 1995).

Hilary Pyle, *Yeats: Portrait of an Artistic Family*, (Merrell Holberton Publishers Ltd, 1997).

Joseph Hone, *W. B. Yeats*, (Penguin Book, 1943).

R. F. Foster, *W. B. Yeats: A Life*, (Oxford, 1997).

島津, 越智編および注釈, *The Autobiography*, (朝日出版, 1970).

鈴木弘, 『イエイツ詩辞典』, (本の友社, 1994).

*Irish-English Dictionary*, (Dublin, 1927).

---

\* 本学文学部

*Concise Oxford Dictionary*, (Oxford, 1964).

*Oxford English Dictionary*, (Oxford, Second Edition).

I

〈祖父ポレックスフェン〉

私の最初の記憶は、まるで天地創造の最初の七日間<sup>1)</sup>を思い出そうとするかのように、断片的で現在の記憶と切り離されているようでもあれば、ついきのうのこのようにも思える。その記憶はすべて連続性がないまま感情や場所に結びついているので、その頃は時間というものがまだ存在しなかったかのようなのだ。

私は、誰かの膝のうえに座っていたこと、何の建物なのかを覚えていないが、ひびが入り漆喰が剥げかけている壁をアイルランド風の窓から見ていたこと、そしてある親戚のものが昔そこに住んでいたといわれたことなどをまず思い出す。私はロンドンにいて窓から外を眺めていた。フィッツロイ街<sup>2)</sup>にある家だ。通りには若者たちが何人かいて、そのなかに今思えば電報配達の若者だろうが、制服姿の者が一人いた。「あの人はだれなの」と尋ねると使用人は「あの人は街を爆破しようとしているのですよ」と脅したので、私は怖くなってベッドにもぐってしまった。

つぎに思い出すのは祖父母と暮らしていたスライゴー<sup>3)</sup>のことである。私は地面に腰を下ろしマストのない玩具おもちゃのボートのペンキが擦れて傷が付いているのを見つめて、ひどく気落ちしていた。「玩具のボートの引っかき傷が前よりもひどくなっている。」そう言いながらも、私は船尾の長い傷を眺めていた。ことのほかその日は傷がずっと長くのびていたからだ。その後、ある日の夕食のとき、私の大伯父のウィリアム・ミドルトン<sup>4)</sup>が「子供の悩みを軽く考えてはいけない。大人は悩みを解決することができても、子供達にはできないから、子供の悩みは大人よりずっと深刻なのだよ」と話してくれた。私は彼に感謝した。自分がひどく不幸だと思いこみ、心の中で「大人に

なったら子供時代は幸福なものなのだと大人のように軽々しく話さないようにしよう」と事あるごとに私は思ってきたからだ。私には悶々とした夜を過ごした体験があった。それは、「どうか私に死をお与え下さい」と数日間お祈りしたあと、本当に死んでしまうのではないかと怖くなり、つぎには「どうか生をお与え下さい」とお祈りした夜のことであった。私の不幸に取り立てて理由はなかった。どの人たちも親切だったし、祖母には何年たっても私は感謝と尊敬の念を抱いている。祖父母の家はいつも身を隠す部屋があるほど、とても広かった。そして赤い子馬と散歩のできる庭が私にはあった。またあとを追いかける二匹の犬もいた。一匹は顔に黒い斑点のある白犬でもう一方はからだ中が毛むじゃらの黒犬だった。そのころ私は神についてよく考えることがあり、とても自分が罪深い人間だと思っていた。そんなある日、石を投げると運悪く裏庭のガチョウに当たって羽根を折ってしまったことがあった。私は罰をうけるのを覚悟していたところ、「ガチョウは夕食に料理されるので罰をうけることはないだろう」と言われて、とても驚いてしまった。

私の悩みは孤独によるものだったが、いくぶんかは祖父ウィリアム・ポレックスヘン<sup>5)</sup>への畏怖の念からだった。といっても彼は親切だったし、乱暴な言葉を云われたことはなかった。しかし彼を畏れ敬うことがあたりまえになっていたのである。彼はたぶん人命救助の功によってスペインのある街の名誉市民権<sup>6)</sup>を与えられていた。しかし彼はとても口数が少なかったので、彼が80歳近くになるまでそれを祖母<sup>7)</sup>は知らなかった。それが知られたのは当時ある老船員が偶然訪ねてきたことからだった。祖母は事実かどうか祖父に尋ねてみると、本当だと述べた。祖母は祖父のことなら何でも知っていると思っていたし、またその老船員は街には住んでいなかったので尋ねようがなかったのである。祖母にもまた祖父を恐れているところがあった。彼は世界各地に行ったことがあり、それを示すものはいくらでもあった。手には捕鯨の鉤によって大きな傷跡ができていたし、食堂にはサンゴをちりばめた飾り簞笥があり、その中には子供の洗礼に用いるヨルダン河の水の瓶、そして通草

紙<sup>8)</sup>に描かれた中国の絵、さらには彼の死後私がもらった象牙の杖などが入っていた。祖父は強靱な肉体をもち、自分がしたくないことを人に決して命じない、という評判があった。何艘もの帆船を所有していた祖父はある時、舵の故障でローシズ岬<sup>9)</sup>に停泊することになったと、ある船長が報告してきたことがあった。すぐさま彼は使者を送って「だれかを飛び込ませて故障の部分をみつけてこい」と命じた。するとその船長は「乗組員は皆尻込みをしています」と答えてきた。それに対して祖父は「きみが飛び込むのだ」と命じた。ところがその船長は従わなかったので、甲板から祖父が自ら飛び込んだという。その付近の人たちはそのようすを小石の広がる浜辺沿いに並んでみている。祖父は皮膚に傷を負って海中から姿を現したが、舵の故障の原因を調べあげていた。

祖父はまた激しい気性の持ち主で強盗に備え枕元に手斧をおいていた。入ろうものなら起訴するよりも殴り倒したであろう。一度などは私は男たちの一団を彼が馬の鞭で追い払うのを見たことがあった。祖父には兄弟はなかったため親戚が少なかった。それに孤高で寡黙な性質<sup>たち</sup>だったので友達の数も少なかった。彼が連絡を取っていたのは難破のあと、彼と乗組員を助けてくれたアイレー島<sup>10)</sup>のキャンベルぐらいであった。また最初に英国海峡<sup>11)</sup>を泳いで渡ったウェップ船長は、彼の雇っていた航海士であり親友でもあったが、ナイアガラの急流を泳いでいるときに溺れてしまった。その人たちが私がせいぜい思い出せる彼の友達である。だが祖父はとても尊敬され、賞賛されていたのでバースの湯治から帰ってきたときなど彼の部下たちは何マイルにもわたり、鉄道の線路沿いにかがり火をたいて出迎えたものであった。

一方祖父の相棒であったミドルトン<sup>は</sup>ふいによく訪ねて来ていた。彼の父親<sup>12)</sup>（ウィリアム・ミドルトン）は大飢饉の後何週間も病人に付き添いそのあと自分の家まで連れていった男からコレラをうつされ、それがもとで亡くなったが、誰に対しても礼儀正しく祖父（ポレックスフェン）以上に頭がよかった。私は自分の祖父と神とを混同して考えていたふしがある。私はひどく憂鬱な気分になったとき、「罪深い私をお罰してください」と祖父に祈った

ことを思い出すほどだ。ところがある時大胆な少女の行動にショックを受け驚いたことがある。その少女とは私の従姉妹だったと思うが、彼女は祖父が4時近くに夕食に帰ってくるのを知っていて街路樹の下で待ち祖父にこう言ったのだった。「もし私がおじいちゃんだったら、私はお人形を買ってあげるのに。」

私たちは祖父を尊敬しかつ畏れている反面、彼の激しく厳格な性格を利用してだますのを悪いこととは思わなかった。彼には人を疑ったり弱々しいところがなかったので簡単にだませたのだった。また、そんなところに私たちは愛情を抱いたのだった。私がまだ7、8歳の子供であった頃、叔父（ジョン・ポレックスフェン）は私をある夜ベッドから呼ぶとローズ岬まで5、6マイル馬に乗って行き従兄弟から鉄道パスを借りてくるように言った。祖父もパスを持っていたが、他人に使用させるのは不正だと考えてとても叔父に貸すとは思えなかったからだ。しかし従兄弟はそんなことに目くじらをたてるような人間ではなかった。私は屋敷に物音が聞こえない所にまで庭を進み、その辺りの通用門から小道を歩いて外へ出た。私は月明かりの中を嬉々として馬に乗った。そして夜更けに従兄弟の窓を馬の鞭でたたいて彼を起こし、帰宅したのは午前2時か3時頃になった。屋敷の前の小道には御者が私の帰宅を待っていた。祖父はそんな冒険が出来るとは思ひもしなかったろう。なぜなら毎夜8時に厩舎のある庭の扉を閉じているものと祖父は信じきっていて、みずからその錠を受け取っていると思っていたからだ。以前のこと、ある使用人がもめ事を夜半に起こしたことがあったので、家の中からだれも外にでられないように取り決めをしたのだった。彼は家の誰もが知っていること、つまり鍵が形式的に受け渡しされているだけで通用門の鍵が閉まっているということを知らなかったのだ。

今日ですら、私は『リヤ王』を読むとき祖父のイメージを重ねてしまう。それと同時に私の劇や詩中の熱烈な人間たち<sup>13)</sup>の喜びが果たして記憶のなかの祖父以上のものであったかどうか疑問に思うこともある。子供時代のわたしに彼を判断することは出来なかったが彼には学問がなかったに違いない。

彼は少年時代海に出て、彼の言葉によると「一介の水夫から船舶業を始めた」からである。彼を思い出すときいつも2冊の本が思い浮かぶ。それは聖書とファルコナー<sup>14)</sup>の『難破』である。その本はいつも彼のテーブルのうえにあり緑表紙の小さな本であった。祖父はコーンウォール地方の旧い家系に繋がる比較的新しい分家の出身であった。祖父の父親は英国軍にいたが、引退し帆船の持ち主となった。そして奥の小さな居間には、祖父が昔は自分のもちものと考えていた旧い屋敷の版画が、壁に描かれた家紋の隣に掛けてあった。祖父の母はウェックスフォード<sup>15)</sup>の女性であり、彼の一族は何代にもわたってアイルランドと関係があり、かつてはゴルウェイのスペイン貿易で貢献していたと伝えられていた。彼には誇り高く周りの者を寄せつけないところがあった。それにひきかえ、ミドルトン家の一人である彼の妻は優しく忍耐強い女性で、奥の小さな居間で粗末なフリーズ地のコートやショールをまとった貧しい人たちに数多くの慈悲深い施しをした。また、毎夜祖父が寝入るのを待って、蠟燭を持ってひとりで家を見回り、手斧で脅かす強盗がないことを確かめたという。彼女は心から庭を愛した人だった。だから彼女が年老いて家事が負担になるまで彼女は好きな花を選び、それを通草紙に描き写したものだ。私は先日彼女の作品をいくつか見たが、その形や色合いの細やかさそして拡大鏡すら必要になりそうな大変細やかなペンさばきに驚いた。また祖父の家には、廊下の壁に掛かっていた中国の絵画、クリミア戦争の色彩画、そして廊下の突き当たりの壁には時とともに黒ずんだ船の絵画などがあったのが思い出される。

祖父の息子や娘たち、私からいえば大人の叔父や叔母たちはよく訪ねてきた。そして、彼らの言葉や行動のほとんどは私の記憶から消え去り、いくつかの乱暴な言葉だけが思い出される。でもそれらの言葉は、なぜかその乱暴さとは不似合いなほど、みんながいつも優しく思いやりがあったことをはっきりと感じさせるものになっている。一番年下の叔父<sup>16)</sup>はがっしりした体格の愉快的な人物だった。彼はドアの鍵穴から風が入らないように皮カバーをつけようとした。そしてもう一人の叔父は長い石造りの廊下の突き当たりの

寝室にガラスケースに模型の砲塔艦を陳列していた。彼は頭が良くスライゴアの埠頭を設計したこともあったが、最近はずいぶん精神に異常をきたし、彼の説明書によると、船体を丈夫な木材で造って沈められることのない戦艦を考案しようとしていたという。6カ月前のことだが、私の妹は羽根のない海鳥をじぶんの腕に抱いている夢をみたことがあった。やがて妹は彼が精神病院で亡くなったことを訊いたのだ。海鳥はポレックスフェン家の者の死や危険を告げる前兆であったのだろう。のちに占星家にして神秘家で愛すべき友となる伯父、ジョージ・ポレックスフェンについていうと彼は<sup>17)</sup>バリーナから滅多に来ることがなかった。彼が来たのは一度だけで、その時は緑色の乗馬服を着た二人の騎手をつれて競馬に来たのだった。さらに私に鉄道のパスを取りに行かせた下のほうの叔父<sup>18)</sup>がいた。彼は祖母に気に入られていたが、使用人の話によると、ガキ大将を木の棒でなぐったので学校から追放されたということだった。私は祖母に一度だけ罰せられたのを思い出す。私は台所で遊んでいると使用人がふざけて私のズボンの前からシャツを引っ張り出したのだ。そのとき、祖母が入ってきたのである。私は何のことやらわからなかったが、子供の下品な行為を祖母に咎められて部屋で一人夕食を取らされた。でも私がいつも怖かったのは叔父や叔母たちの方であった。ある時は、棒でガキ大将をなぐった叔父は、わたしが祖母の出してくれた昼食を食べているのに気づくと、そのことで私を咎め恥ずかしい思いをさせたことがあった。私たちは9時に朝食を、4時に夕食を食べたのであり、食事の間にもものを食べるのはだらしないことだと考えられていたからである。またある時などは叔母に、「街へゆくとき、乗馬姿を見せびらかそうと（手綱をひいて）急に止まると、次ぎには馬の腹を蹴って急に走らせようとしたわね」と責められたことがあった。自分でも罪深いことだと分かっていたことを咎められたので、私は眠れない夜を過ごした。今思えば子供時代のことと言えば辛い思い出ばかりである。年が経るごとに自分の中の何かを克服するかのようになり、私はだんだん幸せになっていった。なぜなら私の悩みの原因は他人のせいではなく私自身の心のなかに巣くうもののせいだったからである。

## II

## 〈良心の声とミドルトン家について〉

ある日だれかが私に良心の声について話してくれたことがあった。そして私はその言葉を考え込んでいるうちに私の魂はどこかに迷い込んだのだと考えるようになってしまった。なぜなら私にははっきりとした声が聞こえなかったからだ。私は何日か悩み不幸な日々を過ごしたが、やがて一人の叔母と一緒にいたとき私の耳に「ほんとうにいけない子ね」という囁き声を聞いた。最初は叔母の言葉に違いないと思った。しかしそうでないとわかったとき、私はそれがわたしの良心の声だと考え再び幸せな気持ちになった。その日以来、その声は大事なときに私に語りかけてきた。しかし今では突然はっとさせるのは私の内なる声である。それは私がすべきことを言うのではなく、私を叱責することもしばしばである。その声は私がなにか考えると「それは正しくないぞ」ということもある。そしてある時などは祈りが聞き入れられなかったことに私が不平をこぼすと、「(だから) おまえは救われたのだよ」などと答えたこともあった。私は家の前に小さな旗竿と隅にユニオンジャックがある商船旗<sup>19)</sup>を持っていた。毎晩私は旗を降ろし丁寧に畳んで寝室の棚に置いた。ところが前夜きちんと畳んだにもかかわらず、ある朝、朝食前のことだったが旗が芝生に触れんばかりに旗竿の下側に結ばれていたのだった。私は使用人が妖精について話しているのをたぶん聞いたせいだろう。私は妖精がこれらの4つの結び目を縛ったのだと思いまた私の耳にささやくのは妖精だとその後ずっと考えた。

私は自分では覚えていないのだが一度ならず部屋の隅に不思議な鳥<sup>20)</sup>を見たそうだ。またかつて夕暮れを少し過ぎた頃スライゴーから海まで数マイル続く水路の近辺を祖母と馬車に乗っていたときのことであった。祖母は私に外地行きの汽船の赤い光を示して「おじいさんが乗ってる船よ」と言ったことがあった。するとその夜眠っているときに、私は悲鳴を上げてその汽船の



難破を告げたそうだ。翌朝祖父は親切な船の乗客がみつけてくれた目隠し革<sup>21)</sup> をかけた馬に乗って家に帰ってきた。私が覚えているかぎりでは、船長に「船が岩礁に乗り上げようとしています」と言われて祖父はたたき起こされた。そこで「帆を船に縛りつけたか」と祖父は尋ねた。うろたえた船長の返事から察するにその指令は実行されていなかった。船の救助ができなかったとき船員や乗客はボートに移らされた。彼自身のボートは途中で転覆したが祖父と何人かは自力で泳いで助かった。婦人達の中にはクリノリン<sup>22)</sup> で浮き、浜辺まで流されたものもいた。「私が怖かったのは海ではなく恐ろしい形相でオールを漕ぐあの人物<sup>23)</sup> であった」というのは生存者の一人のある学校長の言葉であった。しかしながら8人は溺死し、祖父は生涯ときどきその記憶に苦しんだ。そして家族の祈りを唱えるように頼まれたなら私は聖パウロの難破<sup>24)</sup> だけを唱えた。

祖父母以外のことで私がなによりもはっきりと覚えているのは白黒2匹の犬のことである。黒犬は実をいうと汽車に轢かれたため尾がなかった。犬よりも私がそのあとを追いかけていたと思う。そして2匹が行ける範囲は庭の後方にあるうさぎの飼育場までだった。ときどき2匹は激しい喧嘩をしたが、黒犬はその毛で守られていたので傷が少なかった。私が思い出すのは白犬が黒犬の毛に噛みつくとき、御者が水槽の上に2匹を吊しあげ、1匹を水中につけるまで、歯を離そうとしないほどの激しい喧嘩だった。祖母は一度御者にライオンのような毛を切るように言いつけたことがあった。そこで彼は馬丁と長い間相談した後、頭と肩の周りの毛だけを短く刈ったが、それ以外はそのままとしておいた。数日間犬は行方が知れなかったが悲嘆にくれたのだろうと思う。

家の裏にはリンゴの木の繁茂した広大な庭園があった。その庭の中心には花壇と芝生があり、そして二体の船首像<sup>25)</sup> (船の先端に飾られる人物像) があった。一体の船首像は果物の木の枝がおおいかぶさる壁の下に植わっているイチゴの間にあり、もう一体は花々の間にあった。花々の間にある船首像

は流れるような白い服を着た女性像であった。もう一体は制服を着た頑丈そうな男性像で祖父が「ロシア」という名で呼んだ3本マストの船からもってこられたものだ。さらにその頑丈な男性像はロシア皇帝を表し、ロシア皇帝自身から贈られたものだと使用人のあいだでは信じられていた。玄関ドアから大きな樹木の木立を抜けると目立たぬ門がある。そしてその門を抜けると通りがあってそこには壊れかけ汚れた家が並んでいたが、門から玄関までのアプローチ（英国ではドライブと云われる）は200または300ヤードの距離に過ぎなかったため、その道はもっと曲がりくねるように造られたらよかったのにと考えた。というのは私は人々の社会的地位をかれらのアプローチの長さによって判断したからであった。こうした知識は主に馬丁から教えられたのかも知れない。彼は私の第一の友であったのだ。彼はオレンジ党員の詩歌集（プロテスタントの歌集）を持っていた。私たちが共に納屋の屋根裏でその歌をうたった日々に初めて私は詩歌のもつ喜びを教えられた。後にフェニアン<sup>26)</sup>に反乱があるという噂が伝わった時、ライフルがオレンジ党員には配られたと云われたことを思い出す。程なく私は自分の将来の生活を夢み始めたときフェニアンと闘って死ぬことができればと思った。（その夢のなかで私は大きくなったらとても速くて美しい戦艦を造り、運動選手のようにいつも訓練をし、物語にでてくるような勇敢で美しい若者達を私の指揮のもとにおきたいと願ったのだった。そしてローシズ岬の近くの海で大きな戦いとなり、戦死することを夢みた。私は小さな木片を集めそれらを庭の隅に積み上げた。船を造るのに役に立つと思い腐った古木をある遠くの野原に捜しに出かけたことがよくあった。私の夢は船に関するものばかりであった。ある日祖父が夕食に招待したある船長の話に私は関心を抱いた。彼は私の頭においてアフリカの話をしてくれたのである。また別の日、芝生の木立の向こう側で山から上るかのように、埠頭の糸巻き工場から立ち上がる煙を指さして、ベンバルベン<sup>27)</sup>の山が燃えているのかどうか尋ねた船長もいた。

数カ月に一度私はある少年に会いにローシズ岬やバリソデアまで出かけた。彼はかつてはサーカスにいた白黒の斑の子馬を持っていた。しかし彼はその

馬をつないだ場所を忘れることがよくあり探し回った。彼の名はジョージ・ミドルトンで私の大叔父ウィリアム・ミドルトン（母の叔父）の息子であった。大叔父のミドルトンは土地を買ったが当時バリソデアやローシズ岬では安全な投資だと考えられていた。そしてバリソデアで冬をローシズ岬では夏を過ごしていた。バリソデアにミドルトン家とポレックスフェン家の製粉所があったがそこには大きな鮭の漁場や滝もあった。しかし私が従兄に出あったのはローシズ岬でのほうがずっと多かった。私たちは河口でボートを漕いだりスクーナー船や船に装備されたり、大型船のデッキに置かれたりしているボートに乗せてもらったりした。家のなかには大きな地下室があった。というのは100年前その家は密輸業者の家だったからだ。そして時に黄昏時に客間の窓を3回こつんとたたく音が聞こえた。犬は吠え狂っていた。今は亡きある密輸業者がいつもの合図を送っていたのだ。ある夜はその音を私はたいへんはっきりと聞いた。私の従兄もときどきその音を聞き、のちには私の妹も聞くようになった。ある水先案内人が私に語ってくれたことがあった。

「あんたの叔父さんの庭に宝物が埋めてあるという夢を3度みて、真夜中に壁を越えて庭に入り穴を掘り始めたが『いくら掘っても土ばかりで』がっかりしてしまったよ。」私はある人に彼の話しをすると、「宝物は平たいこて（アイロン）のような姿をした精霊に守られているので彼が発見できなくてもしかたがないよ」と云われた。バリソデアには岩に裂け目があったが、そこを通るとき蜂のような音を響かせる殺人鬼が住んでいると信じて恐怖を感じた。

私が田舎の物語に関心を抱くようになったのはたぶんミドルトン家の人を通じてであった。私が初めて妖精の話を聞いたのは家の近くの小屋にいた時であった。ミドルトン家の人たちは身近なものを友と考えていたので、いつも水先案内人や借家人の家を行ったり来たりしていた。ミドルトン家の人たちは実利的でボートを造ったり鶏を飼育したりして、常に自分の手で何かをつくり、野心などというものは持ち合わせていなかった。その中の一人が私の生まれる何年も前に汽船を設計してやがて私が成人したのちも、人々はそ

の船が——そのエンジンは時代遅れのものになっていたので——喘息患者のように水路をぜいぜい音を立てながら走るのを何マイルも離れたところで聞くことができた。その船は湖上で建造され私の母が学んでいた学校の窓の前で立ち止まると、全校を5日間にわたってろうそくを灯すお祭り騒ぎに巻き込んだあげく、多くの馬に引かれて街を通り抜けていったという。やがてその船は幸運をもたらすものと信じられたため、継ぎ接ぎを重ねて使用されていった。その船は建造者の婚約者にちなんでジャネット (Janet) と呼ばれた。その後なまってもっと馴染みがあるジェネット (Jennet) となった。そして私が若い頃その婚約者は80歳で亡くなった。彼女はその激しい気性から夫を悩ませたという。私よりほんの1, 2歳年上のもう一人のミドルトン<sup>28)</sup> (ヘンリー・ミドルトン) が鶏を追い回すと今にも卵を産みそうになるのが勘でわかったのには驚いたものだった。その家の者は家を朽ちるにまかせ温室の窓からガラスが落ちてそのままにしていた。しかし、とにかく彼らの中の一人 (ヘンリー) は予知能力を持っていた。ミドルトン家の者は人に好かれていたが、人望家だったら当然もっているだろう誇りや謹み深さ、礼儀正しさや秩序の感覚などの点で常識に欠けることがあった。

ときどき祖母 (Elithabeth Middleton) は私をつれてスライゴアの老婦人に会いに行った。その人の庭は川まで続きニオイアラセイトー<sup>29)</sup> の咲いた低い壁で終わっていた。そして大人達がシードケーキ<sup>30)</sup> を食べたりシェリーを飲んだりしている間、わたしはとても退屈して椅子にかけていたものだ。もっともおもしろかったのは使用人達との散歩だった。ときどき私たちは小太りの女の子のところを通りかかった。するとある使用人が私にラブレターを書くように勧めた。次に彼女が通りかかったときには、彼女は舌を出して軽蔑の仕草をした。しかしそれよりも私の興味を引いたのは使用人達の話であった。どこそこの街角で、ある男が樽の中に立って物乞いをし、新兵募集係の下士官から1シリングの施しをもらったところ、樽から転がって出てしまい彼の不自由な筭の足を見せてしまったという。また、どこそこの家では、

老婦人が客である士官とその妻のベッドの下を掃除をしていたところ、二人が自分のことを悪し様に云うのを聞いて怒り、その箒で二人をたたいた（などという笑い話もあった。）よく名を知られた一族にはみんな不思議で悲劇的かつロマンチックな伝説があった。私のことを誰も知らないところへ行って死ぬようなことになるなら、私はこれほど辛いことはないと思ったことがよくあった。何年かのちに私が10歳か12歳になったときロンドンにいて、涙をうかべてスライゴーを思い出したものだ。そして詩を書き始めたころ私の詩を読んでもらいたいのスライゴーの人たちをおいてほかになかった。

私が暮らしていたマーヴィル（祖父の家）の隣りに樹木に取り囲まれた家があった。そこには小柄な少年が彼の祖母と滞在していて、私は時折彼に会いに行った。その婦人の名前は忘れてしまったが親切で親しみのある人だった。だかのちに私が13歳か14歳になったとき、その婦人に会いに行くと、その婦人は実は若い少年達の世話をしていたにすぎないことがわかった。<sup>31)</sup>（祖父の家で）客が訪ねて来ると使用人が私の名前を庭で呼んでいるあいだずっと、私は納屋の屋根裏の高く積まれた干し草の陰に隠れていた。

私がお酒に酔ったのは何歳のことなのかわからない（すべての出来事は同じ時の隔たりに思えるのだ）。私は伯父と従兄弟達と共にヨットを走らせていた。すると天候が荒れてきた。私はマストと船首の突き出し棒の間のデッキに横になっていた。すると波が私の上に突然現れ頭上には緑色の水を見たのだった。私は誇らしい気持になったが、びしょびしょに濡れてしまった。ローシズ岬に再び帰ってきたとき年上の少年達の服を着たのでズボンが長靴の下までくるほどだった。そして水先案内人は私に生（き）のウイスキーをくれた。私は2輪馬車で家に帰ったが酔ったときの妙な気分がとてもうれしく、伯父の親切な行為を無にして通行人に出会うたびに酒に酔っているとふれまわった。そして街を通り抜けながら、あちこちでそう云い続けたあと、ようやく私は祖母にベッドに連れて行かれクロフサスグリの味のする飲み物を与えられて眠ってしまった。

## III

## 〈バトラー家について〉

ベンバルベン方向に6マイルほどはなれ、スライゴーとローシズ岬の間にあって感潮河川と呼ばれる水路を越えたところにある、丘の上に蔓に覆われ庭に面している小さな正方形の二階建ての家があった。その庭にはわたしが今まで見たこともないような大きな柘植が垣根に用いられていた。その庭で、わたしは初めてグラジオラスの深紅の縞を見てその花が咲くのを心を躍らせて待った。ある切妻壁の下では、灌木が薄暗い藪のように茂って閉ざされた神秘的な空間を形成していた。そこは子供が遊んだり、またきっと何かが起こりそうな気がするところだった。そこに私の大伯母（父の叔母）ミッキーが住んでいた。ミッキーとは彼女の正しい名前ではなかった。というのはメアリー・イエイツが本名であり、彼女のお父さんは私の曾祖父ジョン・イエイツだった。彼は数マイル離れたドラムクリフの教区牧師を勤め、1847年に亡くなった。彼女は痩せてはいるが血色の良い初老の女性であり、私が今まで見たことがないような老猫を飼っていた。その猫の毛は黄色がかった白で毛がもつれて束になっていた。彼女は農業をしていて、老下男が一人いた。しかしもし周りのお百姓が農機具を貸してもらったことへのお礼の代わりとして、またその家系への尊敬の気持ちから、採り入れを手伝ってくれなかったなら彼女は農業を続けることはできなかつただろう。スライゴーの床屋のジョニー・マックガークは「イエイツ家はなかなか立派な家でしたよ」と私に言ったことがあった。彼女のところには家系の由緒正しさを示す品々がいくつもあった。晚餐用のナイフは何度も磨かれたので短剣のようにかがやいていた。そしてイエイツ家の銘と紋章の入った小さなスチュワート朝風のミルク差しがあった。食堂の暖炉の上にはメアリー・バトラーという人と結婚した4代前の当主（Benjamin Yeats 1750-1795）のものであった銀の杯があった。その銀の杯には花嫁花婿のイニシャルが杯の縁に刻まれるより早く、

バトラーの紋章<sup>32)</sup>と1534年という年代が記入されていた。さる訪問客がパイプに火をつけようと杯のなかの巻き紙を取り出したとき初めて、何代にも亘る歴史すべてがそのなかで時代と共に黄ばんだ一枚の紙に巻かれていたことがわかった。

祖母とたびたび訪れたもう一軒のイエイツ家は二人の子持ちの未亡人が住んでいてこの近くの細長い平屋の中にあった。その家では訪問客を見るときり立つ、とてもどう猛な雄の七面鳥が飼われていた。そこから何マイルか離れたところに大陪審の事務官を勤め地所管理人でもある大叔父のマット・イエイツと彼の子供たちから成る大家族が住んでいた。しかし彼らのことをよく知るようになったのはのちになってからだ。彼らは一人としてポレックスヘン家を好いていなかったと思う。イエイツ家が落ちぶれているのに対してポレックスヘン家の者は金持ちであり、彼らはそれを鼻にかけているように思えたのだ。イエイツ家の者は、低教会派<sup>33)</sup>の流儀からかとても品がよく篤い信仰心をもっていた。それにまた、叔母ミッキイの由緒正しい家柄が思いだされる。私たちの祖先の中に王の州兵でありマールバラ公の將軍の一人がいた。彼の甥が夕食にやってきたとき彼はボイルドポークを出した。すると甥はそれを好きではないと言ったので彼はまたくるように頼み今度はもっと好きなものをごちそうすると約束した。しかし彼はまたボイルドポークを甥に出し、甥は暗黙のうちに彼がいわんとしたことを知った。<sup>34)</sup>先日アメリカから帰国の途上でその將軍の子孫の一人に出会った。彼の家系と私たちとははっきりとした姻戚関係はない。彼も又ボイルドポークの逸話を知っていたが知っているのはそれだけだった。私たちにはその將軍の肖像画がある。鎧と長い巻き毛のかつらをつけて大変立派に見える。そして肖像画の下には彼の名前の後に、多くの勲章があるがそれは私たちの間には残されてこなかったものであった。もし私たちが在郷の民であるならば彼の生涯を語り草にして手短かに述べたであろうに。ほかの祖先たちあるいは大伯父達はアイルランドの歴史に一役買った。セッジムーアの戦い<sup>35)</sup>でサースフィールドの命を救った者もいれば、ジェームス王の軍隊に捕虜となったがサースフィールドのお

陰で助かった者もいる。その1世紀後には、ある地方の農民一揆に対抗して  
ミースの地主階級の者を奮起させようとして道路で打たれて亡くなった者が  
いる。だが2週間もユナイティッド・アイリッシュメン<sup>36)</sup>を追いかけたもの  
の遂に彼らの手にかかって絞首刑にされた者もいる。エドワード・フィッツ  
ジェラルド卿<sup>37)</sup>を逮捕した上句、獄死するような銃弾の傷を負わせた有名な  
サー少佐は私の4代前の子供達の名付け親であった。一方バランスをとるた  
めに私の曾祖父はロバート・エメット<sup>38)</sup>の友人であり嫌疑を掛けられてほん  
の数時間であるが投獄されたこともつけ加えておこう。ある大伯父は1813年  
ニューオリンズで倒れた。またペナン（マライ半島）の総督を務めた別の大  
伯父はラングーンの奪回に決死隊を導いた。そして一族の最後の者でさえ勇  
敢で喜びに満ちた生涯を送ってきたのだった。胸壁（銃眼付きの）と塔がホ  
レス・ウォルポールの影響を残す18世紀の館<sup>39)</sup>で多くの有名人をもてなして  
きたある老人は、多くの装飾品の収集家になっていたのが破産し、ごく最近  
指輪、鎖、時計などをはずしたあと投身自殺を遂げた。そしてもっと情熱的  
な生涯を想起させるのは某大伯父の庶出の子に指揮された小型砲艦がかつて  
ローズ岬に入港したときのことである。

私は彼らの肖像画を現在見ることができるので、それらの絵の裏を見て軍  
人、弁護士、ダブリン城の役人などといった肩書きを見つけると、こんどは  
彼らが知的な本や音楽を好んだのだろうかなどと想像してみる。私はアイル  
ランドで権勢をふるった人々に私の人生を結びつけるものがあるならば、ど  
んなものでも喜びを感じるのだ。あるいは、どこにでもいるような優れた使  
用人、たちの悪い商売人たちにも同じような気持ちを感じている。しかし子  
供の頃はミッキーの話を決して好きではなかった。私は祖父の船がスライゴー  
の湾や河に入ってくるのを見ることができた。船員達は私を恭しく扱い船大  
工は私のおもちゃのボートを造ってくれたり直してくれたりした。だから私  
は祖父ほど重要な人物はいないと思っていた。

今になれば私は彼の情熱や激しさとは違ったもっと優しい性質をまた評価  
することができるだろう。あるスライゴーの老司祭が私に語ってくれたこと



だが、誰か（使用人など）が悪いことをしているのを見つけるのが嫌だったのでいつも曾祖父ジョン・イエイツは鍵をがちゃがちゃと鳴らせながら台所へ入ってきたということだ。また曾祖父の教区<sup>40)</sup>の大土地所有者の代理人が彼と教区の母親たちの家を一軒ずつ回って、子供たちにプロテスタント教徒の学校へ勧誘して回ったときの彼の話ぶりについても語ってくれた。（学校にやることを）ゆく先々の母親たちはみんな入学を約束し、やがて二人はある女性の家にやってきた。するとその家の女性は「私は子供を決してあなたの学校には行かせません」と言いきった。それに対して曾祖父は「わかりました。あなたは今日初めて私が会った正直なお方です」と答えたという。私の伯父で土地管理人をしていたマット・イエイツはリンゴを盗む少年達を捕まえようとして1週間眠らずに見張ったことがあった。そして少年達を捕まえたとき、6ペンスやって二度としないようにと言ったということだ。私が肖像画の表情に、ある種の丁重さや優しさを見いだすのは単なる想像力のせいとか肖像画の穏やかな筆致のせいなのかもしれない。私が最もひきつけられたのは18世紀の二人の顔である。一つは4代前の当主（ベンジャミン）の顔である。二人とも鬢粉をつけた巻き毛のかつらの下になかば女性的な魅力を持っている。そして私は二人を見ていると自分に粗野で荒々しい性質を見つける。だが「私たちにはもともと理性はあるが情熱が欠けている。だがポレックスフェン家との結婚によって激しい情熱を持ち合わせた」と、うれしくなるようなことを言って私を喜ばせたものが、イエイツ家にいた。

肖像画の中にどのような画家によるものか知らないが、ひととき大きな絵画でかなり立派なデッサンがある。それはとても荒削りだがその前に立つと愉快的な気持ちになる。その絵に描かれた人物は私の曾祖母コーベットの縁者であり親しい友であった。そして私たちは彼のことを「ビーティ叔父さん」と子供の頃呼んだが血縁関係はない。私の曾祖母は93歳でなくなったが彼について多くの思い出を持っていた。彼はゴールドスミス<sup>41)</sup>の友人であった。彼は牧師であるにもかかわらず彼を除く者がすべて反逆罪に問われ絞首刑か追放にあった狩猟クラブのメンバーであったことを誇りにしていた。また、

答えると神を冒瀆したり品位を汚すことになるので、自分には返答できぬことがある。だからそんなことを訊ねてはいけないと彼はよく誇り高く言ったものだった。

#### IV

#### 〈父の思い出〉

私は自分の空想に耽ることほど楽しいことはなく、それ以外のことに関心を示そうとしなかったので、教えるににくい子供だった。叔父や叔母たちが私に読み書きを教えようとしたがその年齢だったら当然できなければいけないのにできなかったことなどから、その後身につけたとはいえ、当時の私にはそのような能力が全くないのだと彼らは考えるようになっていた。ある偶然がなければ彼らは皆長い間そう思ったにちがいない。私の父は家において決して教会に行こうとはしなかった。そのようなことが私にある日曜の朝の礼拝に行くのを拒む勇気を与えてくれたのだ。私は、神のことや自分自身の罪のことを思って目に涙を浮かべるほど、多くの場合信仰心をもっていた。でも教会は好きになれなかった。(教会で) 私は踵を引きずって歩いて音をたてたからだと思うが、私の祖母はまず爪先から歩くことを教えようとした。教会で不作法な行為をすることに密かに<sup>42)</sup>喜びを感じた。後になって私が読み書きを学んだとき賛美歌の言葉に喜びを感じたが、賛美歌を最後まで歌い終わるのに、なぜ聖歌隊が私の3倍もの時間がかかるのかわからなかった。そして私の好きな礼拝の一部分、「黙示録」や「伝道の書」の中の説教とある件<sub>くだり</sub>をもってしても何度となく繰り返される賛美歌や立ち続けることによる疲労を癒すものにはならなかった。私の父は私が教会に行かないならば自分が読み書きを教えようと言った。父は私の祖母のために私を教会に行かせたいと思っただけであり、それ以外のことは考えていなかったと今となれば思える。彼は怒りっぽくせっかちな教師であった。腹をたてると私の頭に読書中の本を投げつけたりした。こんなことなら翌週の日曜日には教会に行こう

と私は心に決めた。ところが父は私に教えることに興味をもち授業を単に平日に移して行うことにした結果、私の夢見がちな心は父に押さえつけられてしまった。

父に対する最初の印象は第1回目の授業のほんの数日前に心に焼き付いたと思う。彼はロンドンからちょうど着いたばかりであり子供部屋に突然やって来た。彼は大変黒い顎髭と髪を持ち虫歯の痛みを取るために入れられたイチジク<sup>43)</sup>で片方の頬が膨れ上がっていた。乳母達の一人（一人の乳母は弟や妹たちと共にロンドンからやって来ていた）は別の乳母に生きたカエル<sup>44)</sup>が一番よく効くと聞いたことがあると話していた。その後私はある老婦人が経営する私塾に行かされた。彼女は私たちを何列にも並ばせて後ろの席まで届くビリヤードで使うような長い棒を持っていた。私が第一回目の授業から戻ってきたとき父がまだスライゴーにいて学校で何を教わったのかと私に尋ねた。私は歌（賛美歌）を教えられたと答えると、父は「では歌ってごらん」と云った。そこで私は

小さな水滴から、  
小さな砂粒から  
広大な海原と  
心地よい大地ができる

と甲高い声で歌った。そこで父が私塾<sup>45)</sup>の老婦人に賛美歌を息子に教えないようにということを手紙に書き、その後ほかの教師にも同じことを言ったのだった。まもなく私の妹（スーザン）が長期滞在の予定でやって来た。妹と私はみすぼらしい通りにある小さな2階建ての家に通った。その家では老婦人が私たちにスペリングと文法を教えてくれた。私たちの授業がうまく終わったときにはインドと中国に軍隊を率いていった彼女の父親に贈られた剣を見ることを許された。そして銀の鞘の上に描かれた長い贈呈の銘を一字一字読むことを許された。彼女の家に行き帰るときには、目の前に大きな傘をひろげて刀のようにその柄を握り、ネズミがかじって破った丸い穴から外を見て歩いたりしたものだった。私が単音節語のテキストを済ませて先に進んだ頃

には、(家にいる時は) 書齋と呼ばれる部屋で時間を過ごした。もっともその部屋には私が覚えている限りでは開こうともしなかった古い小説の類と18世紀の末に出版された何巻からもなる百科事典とがあっただけであった。私はこの百科事典を何度となく読んだ。そして木片の化石がその外観に似合わず奇妙な形の石に過ぎないのかどうかを考察する長い一節が思い出される。

父の懐疑主義によって私は神の存在について考えさせられることになり、この上ない不安を感じながら絶えずその問題を考え抜いた。というのは私は宗教を持たずに生きることはできないと思ったからだ。私にとってあらゆる宗教的な感情は、暗雲の間や雲った空から注ぐ光に結びついていた。恐らくそれは神がアブラハムたちに話しかけているある聖書の挿し絵によるのだろう。少なくとも私は感動して涙を流した挿し絵の場面を思い起こすことができる。ある日私は信仰が不可欠であることの決定的な証明を得た。ある牛が子を産もうとしていた。そこで私は農場に出かけると、そこにはその牛が手さげランプを持った農民たちといた。翌日私は朝早くその牛が子を産んだと言うことを聞かされた。私はみんなにどのようにして子牛が産まれたのかと聞くと、誰も答えてくれようとしなかったので私は誰も知らないのだと思いこんだ。子牛は神の授かり物なんだ、それだけは確かだった。明らかにだれも子牛が生まれてくるのを見ようとしなかったし、人の子も同じようにして生まれてきたに違いないと思った。それで私は大人になったとき子牛や子供が産まれるまで寝ないで待ってみようと思決心した。私は雲とそのあいだに突然光が見え神が光の中から雲に包まれた子牛をもたらすことを確信した。そう考えることに私は満足感を覚えたが、やがて昼間に訪ねてきた13、4歳の少年が納屋の屋根裏で並び座って性のあらゆる仕組みを教えてくれたのだ。彼は歳上の少年から性について学んだのだったが、(その子にも多分わからなかったはずの言葉をつかえば) 彼はその少年の男色の相手<sup>46)</sup>であった。そして今振り返ってみるとまるで何か別の肉体生活のことを話しているかのようになされた彼の説明は何週間も私を不幸な気持ちにさせた。最初の印象が徐々に消えるにつれて彼が事実を言ったのかどうか疑い始めていたが、ある

日のこと百科事典中にある一節を見つけだした。私は長い文書を部分的にし  
か理解できなかつたけれども辞典の説明は彼の言ったことを裏付けた。私は  
彼と年長の少年との関係にショックを受けるほど多くのことを知らなかつた  
が、それでもそれは子供時代の夢を最初に打ち砕く事件であつた。

私が死を意識したのは父、母、それに二人の弟と二人の妹とが訪ねてきた  
ときのことである。私は書齋にいたとき足音が走り去り、何者かが廊下で弟  
のロバートが死んだと云うのを耳にしたのだった。弟は何日も前から良くな  
かつた。間もなく妹たちと私はテーブルにかけて半旗を掲げて弔意を表す船  
の絵を描いたのは幸いだった。(そんなことをしたのも) 私たちは港の船が  
半旗を掲げて弔意を表していたのを聞いたり見たりしたことがあつたからに  
違いない。翌日朝食のとき、母と使用人は弟の死ぬ前の夜、妖精(バンシー)<sup>47)</sup>  
が泣いていたのを聞いたと人々が話しているのを耳にした。祖母が病気で寝  
たきりの人たちを見舞うとき、その人たちはまもなく死ぬだろうから一緒に  
ゆきたくはないと私が云つたのはこの直後のことだつたと思う。

## V

### 〈ロンドンでの父の画家修業時代とハマー・スミスの学校〉

ようやく私が8歳か9歳になつたとき、叔母は私に「あなたはロンドンに  
行くことになるわ。ここではあなたは名の知られた家の子だけどロンドンで  
あなたを知る者はいないわ」と言つた。彼女の言葉は私にではなく父に向け  
られたものだということが当時もわかつていたが、何年かたってから叔母が  
なぜそんなことを言つたのかがよくわかつた。叔母は父のことを有能な人物  
で、もし絵に専念していたならばもっと人気のある絵を描く方法を見つけて  
いたに違いない、それにクラブのような場所で毎晩過ごすのはよくないこと  
だと考えていた。叔母はヒーザリー美術学校<sup>48)</sup>をふしだらな場所と思ひ違ひ  
をしていた。母は弟や妹とともにスライゴーにいて、私は一足先に父とイン  
グランドに行ったように記憶している。父と私は風景画家のグループと共に

バーンハム・ビーチス<sup>49)</sup>にある老アール夫妻宅に滞在していた。父は馬車でスラウ<sup>50)</sup>からファーンハム・ロイヤル<sup>51)</sup>を通して来るとき最初に目に入る大きな池を描いていた。彼は春に描き始め1年中描き続けた。その絵は季節と共に変化し、ヒースに覆われた河岸に雪を描く頃には未完のまま絵を中断してしまった。父は決して満足ということを知らない人でありどんな絵でも完成したと思うことはなかった。夕方父は私の勉強のおさらいをしてくれたり、フェニモア・クーパー<sup>52)</sup>の小説を読んでもらったりした。森のなかでは楽しい冒険があった。——緑の窪地でアシナシトカゲと毒蛇が闘っていたりする。——そして時にはアール婦人は私が暖炉の上にイモリがたくさん入った瓶をおいていたので恐くて部屋を片づけられないことがよくあった。またときには道路の反対側の農場に住む少年が明け方私の窓に小石を投げて合図し彼と私は2番目の大池に釣りに行ったりした。ときどきほかの農場の少年と私は古いレボルバー銃で雀を撃つと、彼は糸に吊して焼いたりしてくれた。画家たちの一人がスキャホールディングと呼んでいた老馬がいて、ときにはアール家の息子が私をスラウまで、そして一度はウィンザー<sup>53)</sup>までその馬で連れていってくれた。ウィンザーでは私たちはパブで買った冷たいソーセージのランチを取った。私は一人でいても寂しさを感じることはなかった。というのは、私は当時垣根で囲まれていた広大なビーチスの中をおののくような快感を味わいながら歩き回ることができたからだ。私は池の周りで立ち止まり蘆間に見え隠れする船を空想したり、スライゴーのこと、或いは将来私が乗ることになる美しい船による不思議な海の冒険のことを考えたりしたものだった。私は夜までに勉強のおさらいを見てもらっていたがそれはいつも苦痛だった。思い出す限りでは、かりに勉強に専念できても心からではなく恐怖心からであったからである。<sup>54)</sup>ある日父は私に言った。ある画家が私のことを、とても鈍感で言われたことに無頓着だと語ったという。そして私にはなぜそんな不当なことを言われるのかわからなかった。根拠のないことを言われて私は惨めな気持ちになったがどうしようもないことだった。私はそのことに驚きショックを受けた。

父と私を除いてはみな<sup>55)</sup> ロンドンに行ってしまった。そのなかにおぼろげに名前を覚えているだけだが、ケネディー<sup>56)</sup>、ファラー<sup>57)</sup>、ページ<sup>58)</sup>などの画家がいて、その日彼らは談笑しながら戻ってきた。そのなかの一人が駅の待合室から文字の書かれた看板を持ってきてそれを壁に掛けた。彼は盗んだのだろうと私は思った。だが父とみんなはそれを楽しい会話のネタにした。

そのころ何年か続けて年に一・二度、数週間スライゴーに帰った。その後私たちはロンドンに落ちついた。記憶が正しければ母とほかの妹弟たちは私たちより先にロンドンへ行って住んでいたと思う。<sup>59)</sup> というのは、父がその頃ときどきロンドンへ出かけたのを私は覚えているからである。私たちが最初に住んだ家はノース・エンドにありバーン＝ジョーンズ<sup>60)</sup>の家に隣接していた。一、二年後、ベッドフォード・パーク<sup>61)</sup>へ引越した。ノース・エンドには庭の梨の木にたわわに実がなっていたが、梨にはたくさんの毛虫がついていた。そして正反対側にはオニールという名の校長が住んでいた。ある少年が校長の曾祖父はアイルランドの名家<sup>62)</sup>の流れをくむ家柄だと云ったとき、私はそれを信じて疑わなかった。私がある屋敷の垣根と鉄柵にもたれて座っていた時だった。ある少年が別の少年に私の顔色がすぐれないのは肝臓にどこか悪いところがあるからであり、私の命はもはや1年もないと言っているのが聞こえてきた。私は内心「1年とはずいぶん長い。それだけあれば多くのことができる」と思った。そしてそんなことを頭から追い払った。父が休みをくれたとき、さらに学校に行くようになってからは学校が休日のときなどに、おもちゃのスクーター船のモデルを丸い池に持って行き、たいていは老海軍士官の持つおもちゃの2艘のカッター・ヨットに向かってそれを走らせた。<sup>63)</sup> その海軍士官はカモを見ると「そいつを夕食に持って帰りたい」とよく云ったものだ。また彼は大飢饉のあと、スライゴーを出港した「おんぼろ船」の歌をうたってくれた。その歌を聴くと自分がひどく得意になったような気がした。というのはスライゴーにいたとき使用人からその話をすでにきいたことがあった。その「おんぼろ船」が出港しようとする、身元不明

の男性の遺体が浮かび上がったがそれはとても不吉なことの前兆であった。ロイド保険会社の代理人をしていた祖父はその船を航海に耐えないと判断して使用を禁じたが、深夜にその船はこっそり出港していき、(難破してしまったのだった)。

池にはその池の言い伝えがあり、ある汽船の模型が「水際で燃える」のを目撃した少年は友人として大いにもてはやされたという。私には親切にしていた年端も行かぬ少年がいたが、そうしたのも具体的に何をしたかは知らないが彼のお父さんが不名誉なことをやらかしたため可哀想だったからである。何年かたってようやく、その子の父親がよく知られた彫像の制作者にすぎないことを知った。それらの像の多くは今も公共の場所におかれている。私は父の友人達が彼のことを話しているのを聞いたことがあった。

ときどき私は妹と連れになって家に帰る途中でお菓子屋やおもちゃ屋を一つ残らずのぞき込んだものだった。特にショーウィンドウに砂糖で作られたカッターヨットがあったためにオランダ・ハウスの向かい側の店にはよく行った。そして飲料用の噴水で喉を潤した。一度見知らぬ人が私たちに話しかけお菓子を買ってくれたあと、私たちの家の戸口の近くまでやって来た。私たちは彼に家に入るように勧め父の名を言った。すると彼は入ろうとはせず「ああ、その人なら前の日に描いたものを毎日のように消してしまう画家のことだね」と云ったことがあった。

先日私がオランダパークの近くの飲料用の噴水のそばを過ぎようとした時、辛い記憶が思い起こされた。というのもその辺りで当時私も妹もスライゴーを懐かしむあまりロンドンを嫌うことばかり話していたからだ。私たちは共に懐かしさのあまり涙を流しそうになったが、いまそのことが不思議な気持ちで思い出されるのである。(スライゴーへの) 記憶を愛するあまり私の知っている祖国の土、私の手の中に感じるスライゴー、それらに思い焦がれた人間を私は自分をおいて他に知らなかったからだ。それは未開人の本能にも似た、古くからの民族の本能のようなものであった。私たちは感情を表に出すことを恥じるように育てられてきた。だがスライゴーへの愛着をもっともも



ち続けてきたのは、感情を表に出すことを品が良くないと考えていたはずの母親だった。母はローズ岬の水先案内人や漁師の話を聞いたり話したり、あるいは彼女自身のスライゴアの少女時代の話をしたりして過ごしたものだ。スライゴアは他のどの場所より美しいということが母と私たちの間の暗黙の了解として常に成立していた。今になって思うのだが、母はあの父親の娘であるということを心底誇りに思っていたようだ。当時の母親がどのような人であったかという記憶は大変ぼんやりとなってしまったが彼女は個性の強い人であったと思う。彼女自身の人生への願望は私たちの世話や生活苦のなかで消えてしまっていた。私はいつも母親が眼鏡をかけて縫い物や編み物をしたりしているのを、また質素な服をいつも着ていたのを覚えている。だが十年前サンフランシスコに行ったときのことであるが、母が独身のころスライゴアを離れたという足の不自由な老人が私に会いに来て、私の母は「スライゴアで最も美しい少女だった」と話してくれたことがあった。

私が今まで学んできたことはすべて父に教えられたことであった。父は「品が悪くなるぞ」と言って私を嫌がらせたり、「柄の悪い連中に似てきたぞ」と言って私の自尊心を傷つけた。しかしやがて私はハマスミスにある学校へ送られた。そこは黄煉瓦によるゴシック風の建物であった。机がところ狭しと並ぶ大広間、幾つかの小教室そして寄宿生のための別棟の建物などのすべてはおそらく1860年かまたは1870年頃に建てられたものだった。私はそれをもっと古い建物であり、<sup>64)</sup> 学校の創立者ゴドルフィン卿がその建物を所有していたのだと思った。ゴドルフィン卿は彼にまつわる小説があるために私にとっては空想を呼ぶ人物である。なぜなら私は空想的な人物とは本の中に表されていると思っていたからだ。私たちの運動場の四方の壁の外には、一方の壁の外側には黄煉瓦でできたピアノ工場があった。二・三番目の壁の外には完成半ばですべて黄煉瓦でできた小さな売店や住宅の並びがあった。四番目の壁の外には煉瓦の燃え殻やたくさんの半焼けの黄煉瓦がある煉瓦工場などがあった。顔を忘れてしまったが名前だけ覚えている一人と、名前と顔も覚えているある学友を除けば、私の学友の名前や顔はすべて記憶から消

えてしまった。この二人しか覚えていないのは、ずいぶん昔のことであるだけでなく、そのことが劇的だったり、どういうわけか忘れられない場所に結びついている場合しか覚えていないからであるように思われる。

何日間かハマースミス街を歩いて家に帰るとき、私がいちばん大切にしていたものがみんな奪われてしまったような気持ちになった。私にはダブリンの科学者が父にくれた小ぶりの緑表紙の本があった。その本にはその科学者がホースの岩の間で見ついたりダブリン湾から底引き網でさらった不思議な海洋生物が記述されていた。それは長い間私の愛読書だった。それを読むと私は自分がとても賢くなるように思った。だがそのころの私にはそれを読む時間も空想に耽る時間もなかった。というのも暇があればいつも教科を覚えたり復習せねばならず、さらに正午に昼食をとるために帰宅していたので家と学校を日に4度も行き来するのに時間をとられてしまっていたからだった。

やがて私が今まで知らなかった二つのこと、つまり友情と敵意に夢中になることで私の悩みを忘れることになった。第一日目の授業のあと、少年達が運動場で私を取り囲んで私に質問をした。「おやじさんの名は?」、「仕事は?」、「金持か?」。やがて一人の少年が侮辱するようなことを言った。私はそのときまで決して人を殴ったことも殴られたこともなかった。そしてすぐに自分にはその意志がないのに、私は操り人形であるかのように近くにいる少年達と殴りあっていた。その後私はアイルランド人だということで悪口を言われて、何度も喧嘩をしたが、何年間たっても、一度もけんかで勝った試しがなかった。というのもわたしは華奢で力が弱かったからである。しかし時に私は報復の手段や攻撃の手段さえ見つけた。大股の少年がいて彼は小柄な少年達にとっても恐れられていた。そして彼が運動場で一人で見つけると私は彼のところへ行って「サガン<sup>65)</sup>を上げろ、ガッド<sup>66)</sup>をおろせ」と言った。すると彼は「何のことだ」と尋ねたので、私は「干し草を巻いた足をあげろ。藁を巻いた足をおろせ」と答えて、「アイルランドでは（新兵募集係の）軍曹は、頭の悪い新兵の一方の踝に藁を巻き、もう一方の踝には干し草を巻き付けて、右左を区別させた」のだとも言った。<sup>67)</sup> 私は横つつらを殴ら

れた。私が友達にこぼすと私が自分のせいでそうなったのだから、そう  
なっても当然だと言われた。私は思い切って他にもその類のことをやっ  
てのけたはずだ。というのもイギリス人は芸術家でなければ、知的であ  
るとも行儀が良いとも私には思えなかったからだ。私がスライゴーで  
よく知っていたものはみんな、ナショナリストやカトリック教徒を軽蔑  
していたが、しかし皆はおそらくアイルランド議会の時代<sup>68)</sup>に由来する  
偏見によってイギリスを嫌っていた。イギリス人を笑いものにする  
ような話があったが、わたしはそれをまったく大まじめに受け取って  
いた。たとえば、母はダブリンを好きになれなかったあるイギリス人  
女性にあったことがあったが、その理由は単純でダブリンの男たちの  
足が真っ直ぐすぎるからであったという類のものである。またスライ  
ゴー中の者が知っていた話だが、あるイギリス人が御者に「もし君  
たちが怠け者でないならば山を切り崩してそれを砂の上に広げると  
何エーカーものすばらしい畑が手にはいるだろう」と言ったという話  
もあった。スライゴーには幅広い河口があって、引き潮の時には辺り  
一帯が乾いた砂となる。だが、その仕組みを思い出せないが、満潮  
時には潮が砂の上に広がるからこそ狭い水路でも海運に適するよ  
うになったことを、スライゴーの人は皆知っていた。とにかくその  
御者はスライゴー中にそのイギリス人の話をふれまわって笑いもの  
にした。また人々はその話を例にして英国人が常に不満を言うこと  
を証明しようとした。彼らの不満といったら夕食からあらゆるもの  
にわたる。たとえばノックナリ<sup>69)</sup>の山を取り崩そうとするイギリス  
人がいた、などと云ってみたりした。私の母は鉄道の駅でキスをし  
ているイギリス人を私に示すと、彼らに慎みが欠けていることに嫌  
悪感を覚えると述べたことがあった。そして私の父が私の誕生前に  
故人となったウィリアム・イエイツがイギリスへの旅からダウン州  
の彼の教区に戻ったとき、馬車道で会ったある男について語ったこ  
とを話してくれた。その男はいかにもイギリス人らしく祖父に自  
分のことを話した。イギリス人は一般に個人的なことを話すのが  
自分の名誉になると考えていたようだが、それにひきかえアイル  
ランド人は貧しく借金があったためか、そんなふうに分のこ  
とを話す自信がなかったの

だ、と父は説明してくれた。しかし私はこの説明が納得できなかった。私のスライゴの乳母たちはたぶんアイルランドのカトリック教徒特有の政治的な憎しみを持っていたせいだ、決してイギリス人のことをよくは言わなかった。かつてスライゴの街を歩いていたとき私の目を引く服を着たイギリス人の男女を振り返ってみた。思い出すにその男はグレーの服と膝までの半ズボン、女性はグレーのドレスを着ていた。すると私の乳母はばかにするように「まあ、何てこと」と言った。たぶんこれ以前に「まあ、何てこと。何てこと」<sup>70)</sup>という折り返し句のついたイギリスの歌が流行っていたのだろう。また周りの者はイギリス人はエイやサメでも食べるなどと私に言った。私はイギリスに到着したばかりの時ある老人がポリッジ<sup>71)</sup>にマーマレードを入れているのを見たことがあった。

私は学校で他の少年から孤立した。その原因は、民族間の不信感を表わすどこにでもある逸話によるものだけではなく、相手に抱いたイメージが実像とは異なっていることによるものだった。私はイギリスの少年向きの本を読み胸が高鳴った。しかしあるイギリスの勝利を読んでいても私は自分自身の民族のことを読んでいるとは思えなかった。イギリスの少年はクレシー<sup>72)</sup>やアジャンクール<sup>73)</sup>、そして英国旗を思い浮かべて皆とても愛国的な気分になった。だが私は（その本に書かれた勝利から）ポインの戦いやアイルランドのカトリック教徒を強化したイエローフォードの戦いを回想することもできず、スライゴの山や湖、祖父、船などのことを回想した。アイルランド人に対する反感は高まりつつあった。というのは（メイヨー州の）土地同盟が作られて、地主達が射殺された。政治に関心のない私はそれでも誇りを抱いていた。なぜなら危険な国に生きることは空想的でロマンティックだったからだ。

その質の劣った学校の内儀の悪さは、祖父のイエイツが旅の道中で偶然であった人に経験したのと同様に、イギリスに典型的なものなのだろうと、私は思った。ともかく私は生命を脅かされ何度も殴られ目の回りが黒くなった。そして突き上げるような悲しみや怒りを何度も感じた。ある時のことである。ある少年がいて彼はボヘミア人の素晴らしいガラス製作者の息子で我々より

年長だった。その友人は恋愛事件の故に国外に送られてきたのだが、私たちが「二人とも外国人」であるという理由で私に代わってある少年をなぐってくれた。またもう一人の友人は学校の運動選手にして且つ私の第一の友となり、大変多くの敵を打ちのめしてくれた。彼については名前も顔も覚えている。名はユグノーに由来していて顔はやせこけて柔軟な体を持ち、肌の色や顔立ちがアメリカ・インディアンのものであった。

私はほかの生徒たちをととても怖れていた。そしてそのことから初めて私は自分の勇気に不安を抱くようになった。私は自分の大きな船を造るために庭の角に木片を集めていた幼い頃、嵐の間も冷静で大戦がきても戦って死ぬという自信があった。しかしやがて私は自分に勇気が欠けているということを感じることになった。というのは私は祖父のようでありたかったからだ。祖父は危険がないと考えるや古い帽子を取るためにビスケー湾に甲板から飛び込むほどの勇気の持ち主であった。それにひきかえ、私はとても肉体的な苦痛を恐れていた。ある日教室で私が何か物音を立てると友人の運動選手が咎められて、私が自分がやったと名乗り出る前に彼は二回も鞭で叩かれることになった。彼はたじろぐこともなく手を差し出した。叩かれたあと脇腹で手をこすることもしなかった。私は鞭で打たれなかったが授業の残りの時間立たされた。あとで彼にすまないと言う気持ちに襲われてとても苦しんだ。だが彼は私を責めはしなかった。私は学校で何年か過ごしたあと、いつもいじめの少年たちと決定的な喧嘩をした。運動選手の友人は何カ月もの平和を私に与えてくれた。<sup>74)</sup>しかしとうとう彼は私に代わって拳をふるうのをやめ、私が喧嘩の仕方を学ぶように言い、それまでは他の少年に近寄ってはいけないと言った。私は彼と毎日一緒に帰り、彼の部屋でボクシングの試合をした。そして勝負はいつも同じ結末だった。最初私が興奮していたので有利となり彼を部屋の隅に追いつめたがすぐに、こんどは彼が私を部屋の隅に追いこんだ。そしていつものことながら私が鼻血を出したところで終わった。ある日年輩の銀行家だった彼の父親は、私たちを庭に出させて冷静で礼儀正しくボクシングをさせようとしたが、私たちには何の役にも立たなかった。

ようやく友人は再び少年たちのところに近づいてもよいという日がきた。私が運動場の門の中に入るとすぐにある少年が一握りの泥を投げて「頭のいかれたアイルランド人」と罵った。私は彼の顔を数回殴ったが殴りかえされることはなかった。とうとうまわりの少年たちが友達になろうと言って仲直りした。私はこわごわ手を差し出した。というのも私は喧嘩を続けていたなら打ちのめされるのがわかっていたからだ。そして相手の少年は不機嫌な顔で私と握手した。私は喧嘩が弱いという評判しかなかったので、彼が負けたのはとても不名誉なことだった。彼のボスでさえ彼の腫れた顔をからかった。そして小柄な少年たちが全員を代表して来て、彼らの名指す少年を殴ってほしいと頼んできたが、私は2度と学友とは喧嘩をしなかった。それより私たちは街の少年や近隣の救貧学校の子供達と何度も大喧嘩をした。私たちは投石を禁じられていたので、たいがい勝つことができた。そのため私たちは何としても接近戦に持ち込もうと考え、そうするのに最善を尽くした。風紀係の生徒は街で喧嘩をする少年たちを報告するように言われていたが、彼らが報告するのは投石をする少年たちだけだった。私はいつも運動選手の後について走ったが決して誰も殴らなかつた。父はこうした喧嘩をばかばかしいことだと考えていた。そしてその喧嘩はイギリス人の愚かさであるとさえ考えていた。そのせいか私は喧嘩をしようと思うほど腹を立てることはなかった。またある時友人は敵の少年たちを捕まえる寸前まで追いつめると、彼は相手に拳を稲妻のように放つことに何のためらいもなかった。彼らは素行が悪いのだから何度も殴られるべきだし本当に悪いことをしているのだから仇をとってもよいのだと友は考えていた。そう考えたのは、私たち側の少年の一人が、石をなかに隠して投げた雪の玉にあたりそれがもとで亡くなったからだ。私たちの側は少年たちの両親ともめごとを起こしたこともあった。また、運動選手とある老ドイツ人との間に一悶着あったこともある。彼は私たちが家に帰る途中に毎日通りかかる理髪店の店主だった。ある日友人が窓に向かって唾を吐きかけると家の中のドイツ人の禿頭にあたってしまった。——風紀係は唾を吐くことを禁じていなかった。ドイツ人は私たちを追いかけてきたが、

友人が戦う構えを見せると彼は逃げていった。人に唾を吐きかけることがいけないことであることはわかっていたが、友人に対する私の賞賛の気持ちはいやが上にも高まり、学校中に彼の勇姿を広めた。そして翌日ドイツ人が砂利道を通って校長室に行くところを一人の生徒が見かけたときには大騒ぎとなった。やがて校長にも聞こえるような騒ぎが廊下から聞こえてきた。それは髪の毛の赤い教師がドイツ人を追い出す際に、小間使に「ヤツに外套を盗られないように気をつけろ」といっている声だった。その後の話では、ドイツ人に毎日彼の店の前を通る二人の少年の名前を訊ねられたので、やはりそこを通るが誰の目にも行儀の良い二人の首席の少年の名前を知らせたということだ。だが私の友人には小心なところがあり、そのことが私に自信を取り戻させた。彼は知らない人に話しかけるとき、ときどき気後れをすることがあるため、お菓子やジンジャー・ビアを買ってきてくれと私に頼むことがよくあった。

私には自分でも認めている優れたところが一つだけあった。最初に仲間たちとハマスミスのスイミングプールに行ったとき、私は水面が腿の辺りになる高さまで梯子を降りないと恐くて飛び込むことができなかった。ところがある日一人で行ったとき、水面から5、6フィートの高さの飛び込み台から落ちてしまった。そのせいで私はほかの少年たちよりもずっと高いところから飛び込むことができるようになった。それから水中で泳いだり、水の上に出ても息が切れない練習をした。当時、競争したとしても息切れがしたり疲れの兆候を見せる心配はなかった。そして泳ぎににかけては友人の運動選手よりも優れていた。彼は誰よりも早い足と疲れを知らぬ体力をもっていたが、(泳ぐと) 顔色がとても悪くなった。だから泳ぎにかけてはみんなによくほめられた。私は友人と一緒にいたいために彼が訓練しているときにはともに走った。彼は私をずっと先にスタートさせてすぐに私を追い抜いたものだった。

ある無名のプロ競走者の勝負を報じる新聞を買って、その選手の成績を何か月にもわたって見守ったことがあった。そんなある日、その選手が「アメ

リカ陸上競技の輝ける星」と書かれているのを見かけた。そして新聞は彼をスターに祭り上げ、人々は彼のとりこになっていた。もし彼が「輝ける星」と前から呼ばれていたなら私は彼に関心をもつことはなかつただろう。当時の私は何年か後に彼がそんな選手になるとは思いもしなかつた。

私はもう（玩具の船を造るために）壊れたり腐った木の破片を集めることはしないが、私自身の夢つまりごく当たり前の子供らしい夢を育てていた。授業を学ばないで、私は小テーブルにおいたチェス盤の白のます目を勇敢な行為をする自分の勇姿を描いたペン画で覆った。ある日父が「トラファルガーの海戦<sup>75)</sup>でネルソン提督の船に主計官を務める男がいた。その男は海戦でその髪が真っ白に変わったというが、なんと神経質な男だろう。そんなことなら、何か功績を挙げればよかつた」と評した。英雄になることを夢みた者はたくさんいたが、凡人はやはり彼らに近づくことができないということがなんと非情でそして哀しく思え、私は心を痛めた。そして今もその気持ちに変わりはない。<sup>76)</sup>

## 注

- 1) the Seven Days: 旧約聖書「創世の書」第2章4節までを参照。幼い頃の記憶を天地創造に喩える。
- 2) Fitzroy Road: Regent's Park を囲む Albert Road から Gloucester Avenue へ通じる通り。イエイツはこの地に1867年から1872年まで居住する。
- 3) イエイツが住んだのは1872年～1874年までだが、それ以前から彼の生涯の間頻りに訪れている。ここは母の実家がある。
- 4) William Middleton (1820-1882): イエイツの大伯父。実業家で製粉業を営み、地主や船主でもあった。経営者として優れ、ポレックスヘン家のよきパートナーであった。
- 5) ウィリアム・ポレックスフェン (William Pollexfen 1811-1892): ウィリアム・ミドルトンと協力して、海運業・製粉業で成功した。水夫から身を起こして1833年にスライゴーに帰り、夫をコレラで亡くした従姉妹エリザベス・ミドルトンの仕事を助け、その娘エリザベスと結婚した。住んでいた24ヘクタールのマービル・ハウス (Merville) はイエイツの詩に重要な象徴となっている。



- 6) freedom: citizenship of city (often given honaric causa to distinguished person, 名誉市民の称号。(C.O.D.)
- 7) エリザベス・ポレックスフェン (1819-1892) イエイツの祖母。ウィリアム・ミドルトンの娘。夫ウィリアムとはいとは同士。二人の間には George, Susan, John, Alfred など7人の子供があった。長女 Susan は John Butler Yeats に嫁いだ。その間に生まれたのが詩人イエイツ。
- 8) rice-paper: Kind made from pith of a Formosan plant & used by Chinese artists for painting on (named after rice in error). (C.O.D.)
- 9) Rosses Point: スライゴーから8キロほど北西の入江にある岬。
- 10) アイレー (Islay) 《スコットランド西岸沖の Inner Hebrides 諸島最南端の島》。(『リーダーズ英和辞典』)
- 11) the Channel: English Channel.
- 12) 先代のウィリアム・ミドルトン (1770-1832) 貿易業を営むが密輸も行ったという。
- 13) 祖父のイメージとイエイツの詩に登場する英雄クフーリンなどを比較している。
- 14) William Falconer (1732-1769): Scotland の詩人。当時人気を博した彼の詩 *The Shipwreck* (1762) は船員としての実際の経験を材としたもので、Byron の *Don Juan* の難破の場面に暗示を与えた。*An Universal Dictionary of the Marine* (1769) を出版。溺死した。(『英米文学辞典』)
- 15) Wexford: アイルランド南東部, Leinster 地方の州。
- 16) Alfred Pollexfen (1854-1916).
- 17) George Pollexfen (1839-1910). イエイツとジョージとの交流は80年代から90年代はじめにかけて続き占星術やスライゴーの伝説などの話を聞いた。cf. "In Memory of Alfred". (*Collected Poems*)
- 18) John Pollexfen (1845-1900).
- 19) ユニオンジャックは旗の左上隅にある。
- 20) 妖精をさす。
- 21) 側面目隠しをするもので blinker ともいう。(馬が周囲に気を散らさないで走るようにするために用いる)
- 22) 19世紀になって用いられ始めた婦人のスカートを膨らませるもの。鯨骨などを用いた。
- 23) 懸命にオールを漕ぐ祖父の姿を述べたもの。
- 24) 使徒行伝第27章でパウロが囚人としてローマに向かう途中強風に遭い難破した

- ときの勇気ある行動を述べたもの。
- 25) 水切りの直上を飾る全身・半身・首だけの彫像。
- 26) 1857年頃アメリカとアイルランドで同時に結成された独立をめざす政治結社。  
古代のフィニアンにちなんでいわれた。
- 27) Ben Bulbin: Sligo 近くの台形の山。多くの神話で知られイエイツの詩の題材に用いられる。その麓には彼の墓地がある。("Under Ben Bulbin")
- 28) another Middleton; Henry Middleton のこと。彼は John Sherman のモデルとなった。1919年イエイツが新妻とスライゴを訪ねたとき、門を閉ざして孤独に暮らしていた。My name is Henry Middleton, / I have a small demesne, / A small forgotten house that's set / On a storm-bitten green. / I scrub its floors and make my bed, / I cook and change my plate, / The post and garden-boy alone / Have keys to my old gate....イエイツは彼の住む家の壁を越えて庭に出て居間に入ると三文小説と部屋の中央にはバター攪拌器が転がっていた。彼の従兄は白の夏用スーツを着てめかし込んでいた。彼は2, 3の言葉を交わした後言った。「いいかい。ぼくは人に会えないくらい忙しいんだ。」Joseph Hone, *W. B. Yeats*, (Penguin Books, 1943), p. 22.
- 29) wall-flower: a flowering plant's unit of reproduction (esp. in the form of grain) capable of developing into another such plant: (植) ニオイアラセイトウ。
- 30) seedcake: caraway (ヒメウイキョウ) の種子のはいった香りの良いケーキ。
- 31) その子の本当の祖母ではないことが分かったの意。
- 32) バトラー家の紋章は Ormonde 伯に繋がる。
- 33) evangelical: 英国では低教会派《英国国教の一派; 聖職位や聖奠(テン)(sacraments) をあまり重視せず福音を強調する; cf. HIGH CHURCH》。
- 34) 好意を無にするのは礼を失するという意味。
- 35) Monmouth 公がジェームス2世に1865年に敗れた地。
- 36) ウルフ・トーンによって1791年結成された民族運動団体。
- 37) Edward Fitzgerald (1763-1798): ユナイティッド・アイリッシュメンの指導者の一人。ウルフ・トーンによる1798年蜂起に際して、フランスの援助をえて戦おうとしたが、事前に発覚し蜂起の4日前に逮捕された。
- 38) Robert Emmet (1778-1803): Edward Fitzgerald らとともに民族運動指導者。1800年からフランスにわたりフランスの援助をえて英国への蜂起を画策するも失敗におわる。

- 39) コーベット家所有のサンディマウント城のことをさす。
- 40) 1：教会区，小教区 《教区 (diocese) の下位区分でそれぞれの教会と聖職者 [牧師] を有する》。2：地方行政区をさす。(地方行政上の最小単位で，しばしば教会区と一致)
- 41) Oliver Goldsmith (1728-1774): “The Deserted Village” で有名な詩人。
- 42) out of the way: 「密かに」。
- 43) fig: 神経を麻痺させるのに乾燥させた無花果の葉が使われた。
- 44) live frog: 体温が低いことから冷やすのに使われることを述べている。“as cold as a frog” のような表現もある。
- 45) dame-school: 《昔 婦人が自宅で近所の子供に教えた》私塾。
- 46) 原文は “pathic” となっている。
- 47) banshee: (Ir. & Sc.) a female spirit whose wailing warns of a death in a house. ( OIr.) bean sidhe (f. OIr. ben side) woman of the fairies (C.O.D.).
- 48) Heatherley’s Art School: Newman Street にある。父 Jack B. Yeats のスケッチが雑誌 Fun に掲載され家族は no.23 Fitzroy Road に移った。Heatherley’s Art School で1972年まで父は修業した。
- 49) Burnham Beeches.
- 50) Slough: ロンドン西方に隣接する。
- 51) Farnham Royal: テームズ南岸の Kennington Lane を中に入った通り。
- 52) James Fenimore Cooper (1789-1851): 《米国の小説家; *The Last of the Mohicans* (1826)》などで知られる。
- 53) Slough の西南。
- 54) 父は忍耐力を試したり，勉強を教えるうえでもイエイツを叱りつけたりしたことが何度もあった。時には彼と妹に1ペニーだけを持たせてナショナルギャラリーまで歩かせたこともあったという。(Hone, pp.25-6)
- 55) アール氏の家泊まっていたアメリカ人の風景画家たち。
- 56) Kennedy: 風景画家。
- 57) Farrar: アメリカの風景画家。(Hone, p.23)
- 58) Wilson Page: 父の友人の画家。(Hone, p.27)
- 59) Fitzroy Road から West Kensington, 14 Edith Villas に移った。この間，一家はスライゴーに短期間戻ったが，一足先にイエイツは父と発ち Burnham Beeches に滞在したあと，Edith Villas にいった。その時には母親たちはすで

にそこに住んでいた。(Hone, p.23)

- 60) Burne-Jones : (1833-1898) ラファエル前派の代表的画家。オーブリー・ビアズリーに影響を与えモリスのデザインにも協力した。
- 61) 8 Woodstock Road, Bedford Park, Chiswick. にイエイツは1876-80まで一家は住んだ。その北側には Hammersmith Road が接する。
- 62) オニール家, アイルランドの名家。
- 63) イエイツは最初はスライゴーから持ってきたローズ号のモデルを使っていたが友人達のものに較べて大きさをひけを取るため父は有名なヨット, サンビーム号のモデルを買ってくれた。(Hone p.26)
- 64) ゴシックは15世紀以前の建物であることからもっと古い建物だと感じた。
- 65) Sugaun : アイルランド語で “hay or straw rope” を表す。原文の綴りは Sugaun となっている。(Irish-English Dictionary.)
- 66) Gad : アイルランド語で “a twisted band of straw” を意味する。(Irish-English Dictionary.)
- 67) 軍曹が新兵が右足・左足も区別できないのをからかうのに使ったもの。
- 68) 1782年から1800年までを自治議会時代或いはグラタン議会時代という。この10年間はアイルランドが自治をもった時代として、19世紀後半の自治運動の目標となった。(堀越智, 『アイルランド民族運動の歴史』)
- 69) Knocknarea : スライゴーにある300メートル程度の丘。オシーン, メイヴ女王などの伝説がある。
- 70) tow row row: “The British Grenadier” の一節。Oxford Book of Songs 参照。  
tow-row: [Reduplicated or extended form of row; orig. dial.] (OED)  
名詞で an uproar, hubbub, noisy disturbance, din. などの意味で用いられた。
- 71) ポリッジ 《オートミールや穀類を水か牛乳などで煮詰めてどろどろにしたかゆ》。
- 72) イギリス海峡に近いフランス北部の町; 百年戦争初期 (1346) に, crossbow を用いたフランス軍が longbow を用いた黒太子 Edward の軍に破れた古戦場。
- 73) Henry 5世が9千の手勢だけで6万ものフランス軍を破った戦場。
- 74) Cyril Vesey という名の少年といわれる。(Hone, p.28)
- 75) トラファルガル海戦 《1805年10月21日 Trafalgar 岬の沖合で Nelson の指揮する英国艦隊がスペイン・フランス連合艦隊を破った。イギリス艦隊はナポレ

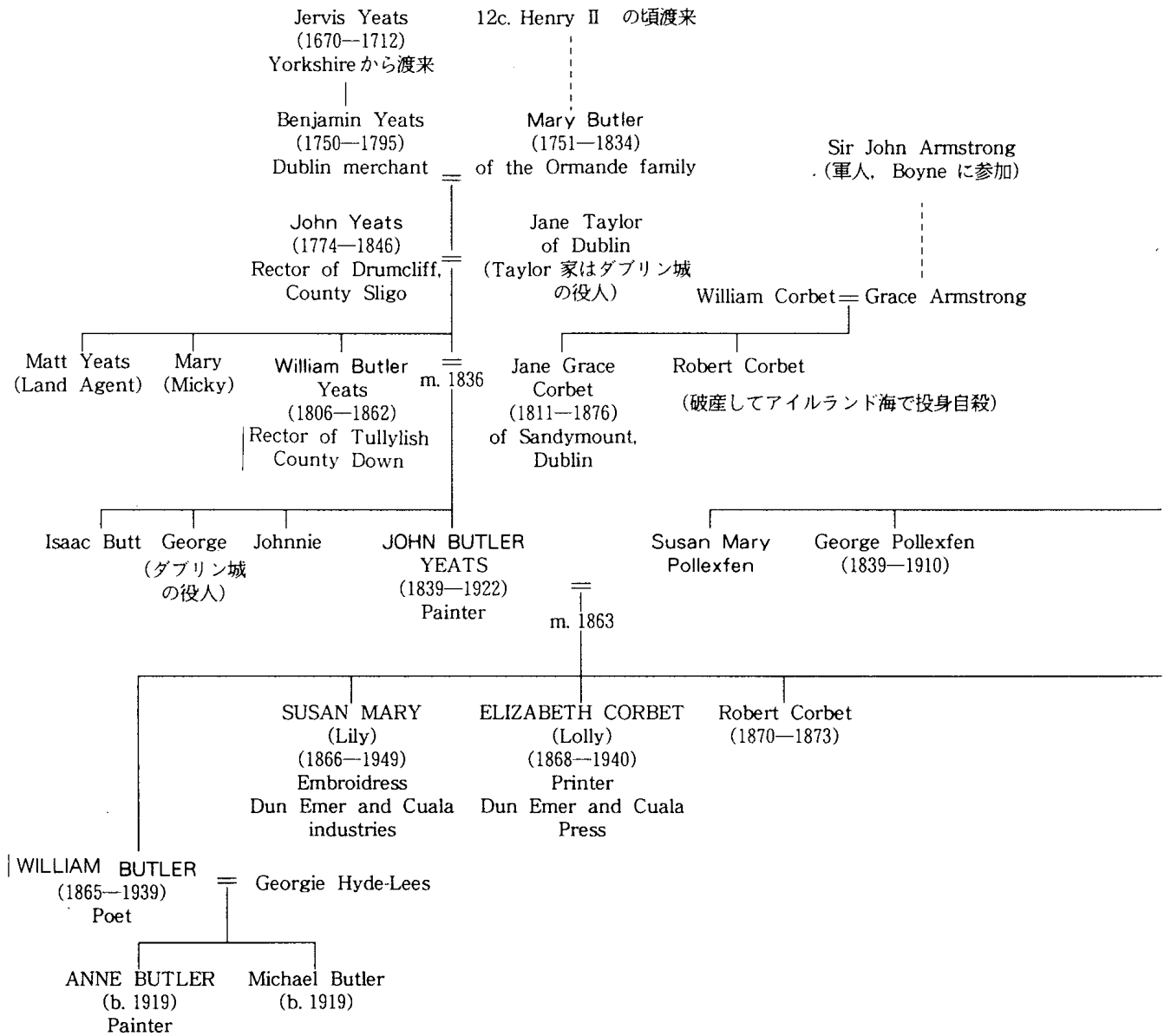
W.B. イエイツ：『幼年期と青春期の回想』 I～V

オン1世率いるフランス側の艦船23艘を撃沈し大勝利を収めた。》

- 76) かつては祖父のように勇敢な人物になるのをイエイツは憧れたが、凡人が英雄に憧れても所詮無駄なことだとイエイツは思うに至った。ここでの主計官は英雄ネルソン提督との対照で述べられている。

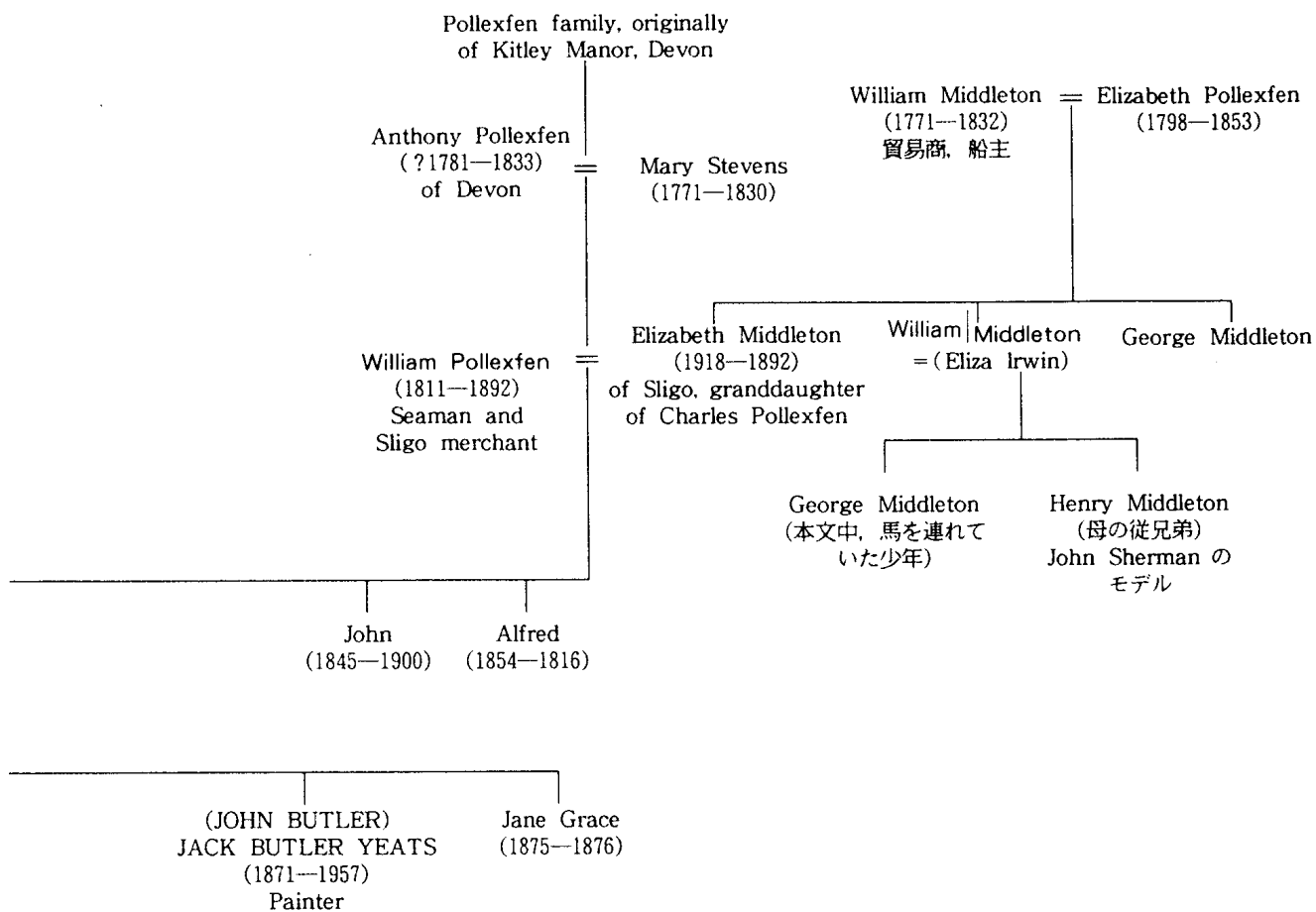
A Yeats Family Tree

<父方>



W.B.イェイツ：『幼年期と青春期の回想』 I～V

<母方>



注) ・この家系図は Hilary Pyle の *YEATS* | をもとにして新たに加筆したものである。  
 ・これは本文中の重要人物で一部割愛している。